

「はけした」は格下になってしまうのか

あちこち出歩いていると不思議な名前の町に行きつくことがある。埼玉県春日部市は大和朝廷時代の部曲^{かきべ}のような名前だが、昔は「粕壁」と書いた。近代その字を忌んで変更したものである。いまも春日部駅近くに町名として残っている。これは読めるからまだよいが、左沢（あてらざわ）、京終（きょうばて）、放出（はなてん）、立売堀（いたちぼり）、指宿（いぶすき）なんて言うのはもうわからない。これらの地名ではないが、むかし外様大名の領地では幕府隠密対策で訳のわからない地名をつけたなどということも聞く。

埼玉県狭山市の県道 8 号線（川越入間線）沿道に「ハケシタ」という地名がある。「ハケ」を漢字で書くと「土扁 + 赤」である。何故この地名を話題に上げたかと言いつと、このハケの字は漢字ではない、この地域でしか通用しない国字なのである。JIS X0213 2 面 4 区 82 点の文字である。町名は「掘兼」だから字名なのだろう。近くの掘兼神社に「掘兼之井」という旧跡（復元）がある。そのそばに立つ近世の碑に「掘ってもなかなか水が得られないという意味で掘り兼ねるといったものらしい」とある。自然河川が少なく、あっても夏場は瀬切れといって流れが途絶えるような地域である。このあたりは水を手に入れるのに苦労した土地柄である。

この文字はバス停標識に書かれていた。このバス停はバス会社 2 社が使っている。一方のバス停標識には「**埒**下」、他方は「赫下」と書かれている。後者は誤りであろう。「赫」は火が赤い、明るいという意味である。文字の通り読むと「カクシタ」となる。

私が看板を確認したのは 1999 年のことだったから JIS-X0213 は制定されていなかった。だからこの文字はワープロにも看板用文字切抜機にも実装されていなかった。

標識の文字はおのあのビニールのディスプレイ用切抜文字で停留所看板に貼り付けてあったから前者は外字でも作ったか、偏と旁を切り張りして作ったのだろう。後者は業者が手を抜いたのか、直す工程を忘れたか、いずれにせよ発注・受注担当者の文字識別能力が薄かったのだろう。

某社の地図で見るとこのバス停は「赫下」と書かれている。地図の調査担当者は 2 本並んでいるバス停標識をよく見たのだろうか。実は間違い表示の看板を出しているバス会社は正解の看板のバス会社より大手なのだ。寄らば大樹の陰かなんて思ってしまう。これを見た地元の人たちはそのうち両方とも同じ意味の文字なんだと思い込んでいくおそれが高い。

将来このあたりの地名は「カクシタ」になるかもしれない。皮肉な人は「格下」というかもしれない。せっかくの大事な地名もこうして滅びていくのである。

「ハケ」と言うのは東日本で使われている言葉で丘陵の末端の崖地を言い、多くは地下水が吐出している場所である。

このあたりは関東ローム層(赤土)が厚く積もっている所だから、崖地はローム層が露出しているのだろう。その地形状態を漢字で表すと「赤土」というのは適切な表現と思う。実際、「国字の字典」(菅原義三・監修、東京堂出版)では狭山市役所員はこの意見であったと言っている。

一般に国字の造字法から言うと、この解釈は正解のように思える。でも私はそればかりではないと思うのである。ハケの断面は上から下まですべて赤かっただろうか。その周辺のあぜ道には赤土は見えなかったのだろうか。要するに崖だけが特出して赤く見えたのだろうかということである。

上に書いたように「ハケ」は地下水脈があらわれていて、その地域の人たちにとって水を得る格好の場所でもある。特に井戸を掘っても水が出ない、自然河川にも恵まれない「掘兼」で「ハケ=水場」という認識がされていたと考えられないだろうか。

仏教語で「闍伽水」という言葉がある。「アカミズ」と読む。仏様に差し上げる水のことである。この「闍伽」はインドヨーロッパ語の「aqua」の漢字表記である。つまり闍伽水とは「水」を重ねた熟語なのだ。外来語を受け入れる場合によくやる手だ。英語で言うところの river Sumida-gawa である。

私の解釈をもうお分かりだろうか。

「ハケ」の義を持つこの文字を案出した人は、この地形に関する字形としてまず扁として「土」を選択した。そこは「赤土」だ。さらに「水」が出る。「赤」1字で「赤と闍伽」二重の「アカ」だ。一石二鳥、旁は「赤」にしよう。

「果たして誰かこの洒落をわかるかな」「土偏より崖のイメージの雁垂れのほうがよかったかな」と作者は書き終えた半紙を見てニンマリ独り悦に入っている。

この文字を見てもそんな光景が目には浮かんでくる。